

接触場面の話し合いにおいて参与枠組みを変容させる発話連鎖

ー提案に対する可決・否決のプロセスを事例としてー

村上萌子(北海道大学大学院生)

1. はじめに

本発表の目的は、接触場面の話し合いにおける、進行役の提案要求に対する参与者の提案、その提案に対する進行役の応答という発話連鎖に注目し、そのような発話連鎖においてどのような参与枠組みが形成されているのかを記述することである。特に、2人の参与者の間で形成されている発話連鎖に新たな話者が参与する場面に注目し、そのような参与枠組みの変容によって何が成し遂げられているのかを考察する。

Goffman(1981)は、多人数会話において「話し手(addresser)」に発話の宛先にされている「聞き手(addressee)」に対して、聞き手として選ばれていない参与者を「傍参与者(side-participant)」とした。日本語教育分野における接触場面研究では、一部の参加者が継続して傍参与者であり続ける状態は「発話機会に不均衡が生じている」とみなされ、特に接触場面では母語話者(NS)と非母語話者(NNS)の間でそのような不均衡が生じやすいと指摘されている(樋口, 2009 他)。

Sacks らはSacks et al. (1974)において、3人以上の会話での話者交替には、直前の話し手が次の話し手になりやすい(A→B→A)という偏りがあることを指摘している。このような「2者間バイアス」(高梨, 2016)は、多人数会話において、1人の話し手と1人の聞き手、その他の傍参与者という参与枠組みが継続されやすいことを意味している。

宮崎・榎本(2019)は、2者間バイアスによって3人目の話者が会話から取り残された際に、2者会話に横槍を入れる、先行発話の詳細化を求める、2者会話の内容についてより詳しい知識の基づいた発話をする、などの手法を用いて会話に参与することを明らかにしている。また、星野(2011)は、話し合いにおいて「ワキの聞き手」(日本語学における傍参与者の呼称)となっていた話者がターンを取得し会話に参与することが、課題解決、話し合いの発展、コミュニケーションの維持において効果的に作用すると論じている。以上を踏まえ、本研究では、接触場面の話し合いにおいては上記のような参与枠組みの変容(ex. 聞き手が傍参与者になる、傍参与者が聞き手になる)がどのように生じ、話し合いを進行する上でどのように作用しているのかを分析する。

2. 方法

分析に用いたデータは、大学の国際共修科目におけるグループワーク(6グループ×1時間)である。グループワークの目的は、授業内で行われる日本語の模擬授業に向けて、授業の内容や役割分担について意見交換と合意形成を行うことである。1つのグループにはおよそ6名、それぞれ2~4名のNSとNNSが含まれる。NNSの日本語レベルは、中級から上級である。参与者同士は授業で顔を合わせる程度の関係で、グループワークを行うのは今回が初めてである。本発表では、グループワークの中でも特に、進行役の提案要請に対してそれぞれの参与者が自らの提案を述べていく中で、1人の案が提示され、可決・否決されるまでの発話連鎖に注目し、会話分析の手法を用いた分析を行った。その理由は、提案の可決・否決が話し合いの目的である合意形成の核となる部分だと考えたためである。

3. 結果

3.1 話し合い全体の特徴

まず、今回のグループワークでは、多くのグループに共通する次のような話し合いのパターンがみられた。まず、グループワークでは司会のような役割は事前に決められていなかったが、1人の話者(主に話し合いの最初にターンをとったNS)が提案を促したり提案の可決・否決を最終的に決定したりする役割を担っていた。そして、他参加者は主にその進行役を宛先として提案を述べていた。その結果、全体を通して、①進行役の提案要請、②他参加者が進行役に対して提案、③進行役の応答、という一連のパターン(図1)がみられた。そして、1人

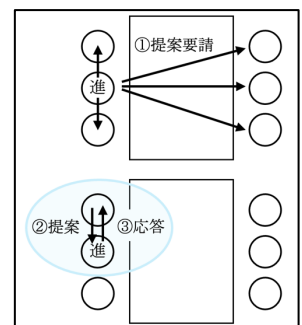


図1 話し合いの基本的なパターン

の参加者が提案を述べる際には、進行役と提案を述べた参加者の2人が話し手と聞き手となるターンが数回に渡って続き、その他の2~4名の参加者が傍参与者となる傾向があった。この傾向は、1章で示した「2者間バイアス」の指摘に一致している。

3.2 事例分析

一方で、上記のパターンとは異なる発話連鎖として、一部のグループで次のような特徴的な発話連鎖がみられた。それは、1人の話者が進行役に対して提案を述べた後、進行役がその提案に続いて議論を展開する発話を提案者ではなく別の話者を宛先として行う、というものである。つまり、そのような発話連鎖は、提案者と進行役を話し手・聞き手とする参与枠組みを、進行役と別の話者を話し手・聞き手とするものへと変容させているといえる。

以下では、1つのグループの話し合いから取り出した3つの事例を示す。当該グループの参加者は、NSの山本、田中と、NNSのソニア、カミラ、ミン、リンの6名である(図2)。まず、3.2.1では、上記のような特徴的な発話連鎖をみる上で、その比較対象として、提案者が進行役に対して提案を述べた後、提案者と進行役を話し手・聞き手とする参与枠組みで提案が否決される事例を示す。次に、3.2.1では、上記のような参与枠組みの変容がみられる事例を2つ示す。なお、本発表のトランスクリプトにおける視線の記述はMondada(2018)を参照し、「...」は視線が手元から他の場所に移動している区間、「---」は視線が保持されている区間、「,,,」は視線が手元に戻りつつある区間を表している。ただし、トランスクリプトを簡潔にするため、今回の分析に関与しない部分は視線の記述を省略している。

3.2.1 提案者を聞き手とする参与枠組みで提案が否決される事例

事例1は、このグループで進行役(のような話者)である山本が、「~をします。」という文型を用いた例文を挙げるよう全員に促した後の会話である。この山本の提案要請に対して、ソニアは「コンサートをします」という例文を提案する(01)。これに対して山本は理解を示し(02)、ソニアの提案を繰り返しながらPCに入力している(04)。ここから、山本がソニアの提案を受け入れ始めていることがわかる。その後24行目まで、山本とソニアの2者間で、提案理由の説明と産出のトラブルの修復が行われている。その提案理由の説明の途中で、傍参与者となっていたリンが「っと一般的には」(20)、「見ます:: °()°」(25)と発話していることがわかる。そして、25行目の発話を受けて山本が「°ん?°」と聞き返したことで、リンがソニアと山本の会話に参加する。28行目で一度リンは「大丈夫(です)」とターン取得を回避するような発話をするが、29行目で山本に継続して宛先として選択されると、30行目で「え:コンサートは一般的にはみえますじゃない」と発話する。この発話は、「コンサートは学習者にとって一般的に「する」ものではなく「見る」ものであるため、「~をします」の例文としては不適切である。」というソニアの提案に対する反論だとわかる。この反論を受けて、山本は「まあ確かに」と理解を示すとともに、30行目の時点でリンに向けていた視線をソニアに移し、ソニアを宛先として「コンサートすることはないか」と提案が否決されるべき理由を述べている(31)。それに対してソニアは32行目で理解を示し、35行目で自らの提案が不適切なものであったことについて謝罪している。以上のように、事例1では、途中でリンの参与があったものの、提案に関する最終的な合意形成が、提案者であるソニアを聞き手とした参与枠組みを保持した状態でなされていることがわかる。

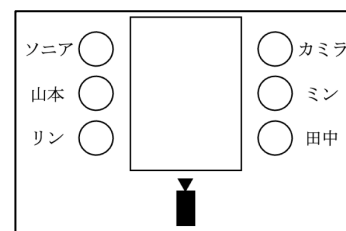


図2 参加者の配置

事例1

01 ソニア: コンサートをします。
02 山 本: あ:::
03 ソニア: だい(*じょうぶ*)
04 山 本: コン[サート]をします。((山本がpcに入力 ~12))
05 ソニア: [そう,(.)コン]サート。
06 山 本: うんうん。
07 (.)
08 ソニア: コンサートとか、
09 (1.1)
10 ソニア: え:::
11 (0.4)
12 ソニア: [例-(0.4)例-] (かたいかい) はちょっと難しい=
13 カミラ: [hhhh() .h]
14 ソニア: =でも↑コンサートって(0.3)学習者は(.) 知るか?hh
15 (0.5)
16 ソニア: [.hh]
17 山 本: [*s-]s-知らない? *(不安そうな声色で)
18 (.)
19 ソニア: [知る.(.) わかる. 学習者は.]
20 リ ン: [っと一般的には]:
21 山 本: わかる?
22 ソニア: うん.=
23 山 本: =あ::[:
24 ソニア: [コンサートは[英語で,](.)由来して[(たつて)]
25 リ ン: [見ます::] [°()°]
26 山 本: °ん?°
27 (.)
28 リ ン: +\$大丈夫+夫\$(です)
Yam.g: +...+L----->>
Son.g: \$.....\$Y/L->>
29 山 本: *+大丈夫+夫.*=
Yam.g: ->>L+,+
30 リ ン: =()こ+え: +コンサートは°+一般的には+見ますじゃない°()
Yam.g: +...+L-----+ , , , , , +
31 山 本: \$まあ\$確(h)か(h)に(h) (.) ¥コンサート+する+ことはないか¥.+h+
Yam.g: +...+S-----+...+
Son.g: ->>Y/L\$...\$Ypc----->>
32 ソニア: [あ:::hh
33 山 本: [おお.hh
34 (0.4)
35 ソニア: ごめん¥.=
36 山 本: =.hha.h そっかそっかそっか、((pcのDeleteキー?を連打))

1 ここでリンがターン取得を回避しているという解釈は、その前の20行目や25行目でターンを取得し会話に参加しようとする(山本に届く大きさの音量で、語末を延伸させることでオーバーラップを解消しようとする)振る舞いと矛盾しているともいえる。25行目の後半の聞き取り不能な箇所の内容によって、「大丈夫(です)」という発話の意図の解釈が異なる可能性があることのみ、ここで指摘しておく。

3.2.1 提案者を傍参与者とする参与枠組みで提案が否決される事例

一方で、以下の事例2, 3では、事例1のような提案者を話し手・聞き手とする参与枠組みが変容し、提案者が傍参与者となった状態で提案の可否が決定されている。つまり、提案に関する優先的な権利と説明責任を持つはずの提案者が会話から取り残された状態で、合意形成がなされているということである。

事例2は、「～を[他動詞].」という文型について、どのような質問文を学習者に提示すべきかについて議論している場面である。01-05行目でリンは、「まずは:その:はいといいえで答え:」「え::°」「質問」と発話する。この発話は「最初はYes/No 質問のほうがよい」という提案だと推測され、その後の会話でもそのように理解されている。このリンの発話は、言い淀みが挿入されていて非流暢さがあり、統語的にも完結しない形で発話されている。このリンの提案に対して山本は07行目で理解を示し、09行目で提案内容について確認を求める。注目したいのはその後の発話連鎖である。山本の発話に対して、リンだけでなくもう1人のNSである田中が応答し、「はいといいえで、」(11)、「答えられるやつのほうが」(14)とリンの01-05行目の発話を末尾を補うような形で言い直していることがわかる。傍参与者であった田中が山本とリンの2者会話に参与するという振る舞いは、事例1におけるリンの振る舞いと類似している。異なっているのは、その後の山本の発話の宛先である。20行目で山本は、「パンを食べますか」とリンが提案したYes/No 質問の例を提示する。この発話は、山本と田中が視線を交わらせた状態で発話されており、田中を宛先にしたものだと理解可能である。実際に、宛先とされた田中は22行目で「や朝ご飯食べましたか(のほうが)」とよりよい質問文を示すことで山本に反論し、最終的に田中の提示した質問文が採用されている。事例2では、リンの提案は具体例の提示によって非明示的に可決されている。しかし、その合意が形成される過程でリンは傍参与者となり、発話機会を与えられない状態でいたことがわかる。

続く事例3は、事例2の直後の会話である。01-08行目でソニアは、教師と学習者のやりとりをやってみせながら、「本、アニメ、マンガ、でどっち²がいいですか。」「どっちが好きですか」「どんな本を読みますか。」という質問文を提示している。事例2で「朝ご飯を食べましたか」という質問文が採用された後にこの発話がなされていることから、このソニアの発話は新たな提案の開始として理解可能である。山本はこの発話の聞き手として、笑い³によって反応を示している(05)。しかし、この質問は事例2で決定された「Yes/No 質問にする」という前提に反している。このソニアの提案に対して、09行目で田中が会話に参与し、「あ:ミステリー-とか。」とソニアの提案に理解を示しつつ、「どんな本」の答えとなる本のカテゴリーの例を提示している。この田中の提示した例から、13行目で山本は「ミステリーを読みますか。」というYes/No 質問という前提にそった新たな質問文を提示している。これに対して、ソニアも「うん」と同意を表明している(14)。その後、長い沈黙があり、これ以上議論がなされないと判断した山本が、16-22行目で独話的な発話をしながら、提案内容をPCでメモし始める。それらの発話の中には「本が好き」(20)とあり、山本の新たな提案(13)があった後も、ソニアの提案が完全に否決されたわけではないことがわかる。しかし、22行目で山本は「本読みん(°んゝ°)」と何らかの疑問が生じたことを示し、その後の24行目で「>なにになにうおっくだよね。」と発話している。これは、模擬授業で扱う文型が「〇〇を」という助詞をと

事例2

01 リン: まずは:その:はいといいえで答え:
02 (0.6)
03 リン: °え::°
04 (1.0)
05 リン: 質問
06 (0.5)
07 山本: あ:::そっか::
08 (.)
09 山本: はいといいえがいのかな。
10 (0.3)
11 田中: はいといいえで、
12 (.)
13 リン: °はいと[いいえで°(.)] 最初は(:°はい°)
14 田中: [答えられるやつのほうが]
15 (.)
16 リン: .hh はいといいえで
17 (0.5)
18 リン: °と(思う)°
19 (1.0)
20 山本: ¥パンを+*食べ+*ますか¥*.hh+*
Yam.g: +...+T-----+
Tan.g: *...*Y-----*,,, *
21 (.)
22 田中: や朝ご飯食べました[か(のほう)]
23 山本: [(あ)朝ご飯を食べましたか
24 (0.8)
25 山本: たしかにね。
26 (7.2)
27 山本: あ:::さ:::ご::°は:::ん°((山本pcで入力しながら))

事例3

01 ソニア: 本や、アニメ(や)、まんがが、(.)な-(.)まんがが、どっちが=((山本がpcで入力 ~13))
02 ソニア: =いいですか(。)どっちが好きですか。
03 (.)
04 ソニア: [と聞いて]て、あ、本が好きです.=
05 山本: [hhhh]
06 ソニア: =あとは、
07 (0.7)
08 ソニア: どんな本を(0.5)>よみ<よみますか読みたいですか。
09 田中: [あ:ミステリー-とか。
10 ソニア: あ:::=
11 田中: =そうゆう()
12 (.)
13 山本: ミステリーを、(.)読みますかあ:[そうね
14 ソニア: うん
15 (4.7)
16 山本: え:::::((山本がpcで入力))
17 (2.3)
18 山本: 本は、
19 (4.8)
20 山本: 本が*好き°,((山本がpcで入力 ~23))
21 (0.5)
22 山本: 本読みん(°んゝ°)
23 (1.3)
24 山本: >なにになに+*うおっく<+*だよね.*
Yam.g: +.....+T----->
Tan.g: *.....*Y-----*
25 (0.4)+
Yam.g: -->>+
26 田中: [ん、[そう]だね。
27 カミラ: [そう、を。
28 リン: [(そう)
29 山本: [なにになに]を
30 (0.6)
31 山本: °します°

² この「どっち」は、「どれ」と発話しようとして語の選択を誤ったものだと推測する。

³ 山本の笑いは、ソニアが1人2役で会話をやってみせたことを「笑えること」として受け取ったことによるものだと考えられる。

るものであることについて確認を求める質問だと理解できる。つまり、この質問は、ソニアの提案を採用できない理由について確認を求めるものとも言える。そして、それに確認が与えられることで、ソニアの提案は完全に否決されることになる。ここで注目するのは、この確認求めが田中を宛先として行われていることである。発話の宛先が田中であることは、山本が質問を産出してから田中が応答するまで視線を田中に向けており、田中も山本に視線を向けていることから判断可能である。つまり事例3では、ソニアの提案は採用できないという合意が形成される過程で、ソニアが傍参与者となっている。

4. 考察

今回の分析事例でみられた、進行役がその提案に続く議論を展開する発話を提案者ではない話者を宛先として行う、という振る舞いは、どのような参与者の志向によって生じ、何を成し遂げているのだろうか。多人数会話における修復の分析を行った Bolden (2011) は、修復が開始される際に開始者がトラブル源の発話者ではなく他の話者を宛先にするという現象に注目し、そのような次話者選択が行われる背景には、修復開始者の“progressivity (進行性)”と“social epistemic (社会的認識論)”への志向があると論じた。“progressivity”への志向とは、挿入的な活動である修復による中心的な活動の中断を最小限にし、会話を前へと進行させることへの志向である。そして、“social epistemic”への志向とは、修復開始に応答するのに十分な社会的知識を有している話者を選択することへの志向である。つまり、Bolden の分析において修復開始者は、より社会的知識を有する話者を次話者として選択することで迅速かつ確実に修復を実行し、会話の進行性を確保することを志向しているといえる。ここから、本研究の分析事例においても同様に、進行役はより十分な知識を有する話者を宛先として提案内容についての議論を展開することで、より確実な応答を得て、話し合いの進行性を確保していると考えられる。

今回の分析事例では、最初の提案者はどちらも NNS であり、参与枠組みが変容する際に進行役が宛先として選択した話者は NS であった。ここから、NS という話者の属性が、より十分な知識を有しており、会話の進行性を確保する上でより「ふさわしい」話者として参与者に志向されていると考える。今回のグループワークでは、NS が分析事例の山本のように進行役を担ったり、田中のように NNS の意見述べを援助したりする場面が多く見られた。このような振る舞いも、NS が自らの「NNS よりも知識を有する NS」という属性を志向したことによるものだと考えられる。

しかし、「知識を有する/有さない」という参与者の認識は、必ずしも NS/NNS という属性のみによって作られるわけではない。今回分析したグループでは、本発表において提示した事例の他に、NNS であるリンからソニアとカミラへ山本の発話の宛先が変更される事例もみられた。事例2の分析において述べたように、リンの発話は、言い淀みや統語的に完結しないものが多かった。そのようなリンの非流暢性が、「十分な知識を有していない」あるいは「会話の進行性を妨げる」という参与者の認識に繋がり、山本の宛先変更が行われていたのではないだろうか。このように、発話の宛先選択に影響する要因としては、NS/NNS という話者の属性と、会話の中で後天的に作られる認識という2つの側面があると考えられる。

5. おわりに

本発表では、国際共修科目のグループワークにおける提案の可決・否決プロセスの分析から、接触場面での話し合いにおいて参与枠組みを変容させる発話連鎖と、そのような発話連鎖を生じさせる参与者の志向について考察した。今後は、提案の可決・否決プロセス以外に分析対象を広げるとともに、「十分な知識を有していない」という認識に繋がる話者の行動をより詳しく分析することで、接触場面において発話機会の不均衡が生じやすい要因を明らかにすることができると考える。

謝辞 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものである。

参考文献

- Bolden, G.B. (2011). On the Organization of Repair in Multiperson Conversation: The Case of “Other”-Selection in Other-Initiated Repair Sequences. *Research on Language & Social Interaction*, **44**(3), 237-262.
- Goffman, E. (1981). *Forms of Talk*. Pennsylvania, University of Pennsylvania Press.
- 樋口裕子(2009). 接触場面の話し合いに見られる日本語母語話者の調整: 接触場面と非接触場面の話者交替(turn-taking)を比較して 大阪大学紀要, **43**, 107-122.
- 星野祐子(2011). 課題解決型話し合いにおけるワキの聞き手の参与の効果 十文字学園女子大学短期大学部研究紀要, **42**, 147-159.
- 宮崎太我・榎本美香(2019). 話者交替における二者間バイアス解消ストラテジーの解明 情報処理学会研究報告, Vol. 2019-HCI-184, No. 17, 1-8.
- Mondada, L. (2018). Multiple Temporalities of Language and Body in Interaction: Challenges for Transcribing Multimodality. *Research on Language and Social Interaction*, **51**(1), 85-106.
- Sacks, H., Schegloff E. A. & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for organization of turn-taking for conversation. *Language*, **50**(4), 694-735.
- 高梨克也(2016). 基礎からわかる会話コミュニケーションの分析法 ナカニシヤ出版